

2023年度  
非文字資料研究センター  
第2回公開研究会

「戦時下紙芝居と現代人形劇の交差点」

日 時：2024年2月23日（金・祝）14:00～17:00

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 1号館 308号室

プログラム

司 会：新垣夢乃（非文字資料研究センター 研究員）

開会挨拶：中林広一（非文字資料研究センター センター長）

趣旨説明：松本和樹（非文字資料研究センター 研究協力者）

実演・解説 紙芝居「どんぐりと山猫」：高瀬あけみ（子どもの文化研究所）

実演 人形劇「なかよし」：瀧見英明（人形劇の図書館 館長）

講演 「国策人形劇と現代人形劇」：瀧見英明（人形劇の図書館 館長）

コメント：安田常雄（非文字資料研究センター 客員研究員）

討論・質疑応答

参 加 者：73名（関係者、オンライン含む）

開催報告

松本 和樹  
（非文字資料研究センター 研究協力者）

研究会要旨

1920年代～30年代に誕生、成長した現代人形劇と紙芝居は、ともに戦時下を経験、くぐり抜けてきた。人形や紙芝居という媒体を介するこの二つの新しいメディアは、いかに戦時下の社会に向き合い、いかに演じられ

てきたのだろうか。両者にはいかなる共通点や相違点があるのか。そして、両者の比較・検討から、戦時下の大衆メディアを捉える視点にどのような論点を提起できるか。本研究会は、このような問題意識のもとに組まれたものである。

当研究班では、戦時下に紙芝居を制作・実演していた地域の調査を国内や台湾、韓国で実施している。調査では、紙芝居作品の新規発掘を行うのと同時に、現地で紙芝居にかかわった人びとの動向にも目を向けてきた。そこには、「戦争と紙芝居」についての全体像を明らかにし、戦争下の人びとの姿を照らし出す、という当研究班の狙いが反映されている。こうした調査研究の成果は、2018年刊行の叢書『国策紙芝居からみる日本の戦争』や、『非文字資料研究センター Newsletter』各号の調査報告、2022年刊行のブックレット『国策紙芝居 地域への視点・植民地の経験』、公開研究会などで発表してきた。

調査を通じて浮かび上がってきたのが、戦時下の文化運動の多様性である。とくに翼賛文化運動で実践された「素人演芸」は、演劇、浪曲、歌謡曲、舞踊、剣舞、詩吟、手品、漫才、レビューなど多様なジャンルからなり、本研究会で取り上げる紙芝居と人形劇もその一環であった。すでに指摘されているように、「素人」という言葉は、「職業化」との対義語であり、紙芝居や人形劇などの「素人演芸」は、「職業演劇とは異なり、自らが属する集団生活の中で、成員の「健全な生活感情を表現」するものであり、それを通じて人々が生活への意欲を新たにするための営み」として実践が奨励された（神山彰編『戦時下の演劇 国策劇・外地・収容所』森話社、



資料1 公開研究会ポスター

2023年)。こうした性格を持つ戦時下の紙芝居と人形劇が各地でどのように演じられたのかという問題は、戦争下の人びとの姿を照らし出すうえで重要な論点と言えるだろう。これが、本研究会が戦時下の紙芝居と人形劇に注目した理由の一つである。

本研究会が戦時下の紙芝居と人形劇に注目した理由のもう一つは、これらがそれぞれの領域においてどのような位置を占めるのかを考えることが、国策としての紙芝居や人形劇の性格を考える重要な手がかりとなるからである。それはまた、国策としての紙芝居や人形劇が、現代の紙芝居や人形劇とどのように連続・断絶しているかという問題にかかわってくる。

以上の問題意識を踏まえて、本研究会では、両分野の専門家による実演と講演を通じて、戦時下の紙芝居と人形劇がいかなるものだったのかについて検討することを目指した。まず、戦時下の紙芝居について、紙芝居の実践・研究者の高瀬あけみ氏に実演をお願いした。次に、当時の人形劇について、国際的に著名な人形劇演者・研究者である瀧見英明氏に実演と講演をお願いした。

最初に登壇した高瀬氏は、宮沢賢治の童話を脚本化した「どんぐりと山猫」（日本教育画劇、1943年）を実演し、紙芝居作家・児童文学作家で宮沢賢治研究でも知られる堀尾勉（青史）が1943年に書いた論考を手がかりに、紙芝居と人形劇の差異を述べた。堀尾は論考で紙芝居の特徴を人形劇と対比させながら論じている。堀尾が強調したのは、場面／物語、笑い／感慨深さ、という人形劇と紙芝居の違いであり、それを引き立てる要素としての紙芝居の絵・脚本の独自性である。

「（引用者注：紙芝居の）文芸的な傾向も悪くはないと思った所以を云ふと、このしばらくといふものは素人芝居や指人形芝居ことに関はってゐてそう思ったのだが、これらの芝居は紙芝居よりも勿論演劇的だ。といふのはをかしいが、まぎれもない芝居だが、その芝居が共に素人の演ずるもので、目的も運動方法も紙芝居と同じ性質のものなのだが、観客の感動する性質が違ふのだ。早い話が、指人形劇の効果は殆ど人形の面白さに終始してゐる。

ぎこちない動きのをかし味、手作り人形の表情の奇妙さ、それだけで観衆はたのしく笑ふ。滑稽にかけてはこれにかなはない。真面目な劇や悲劇もやるけれど、先づ笑ひに生命がある。この指人形が文化運動として紙芝居の開拓した線を一気に広がってゐるのだ。それはよいことだ。ところで素人芝居も指人形劇も劇としての約束があつて紙芝居のやうに自由に時間や場所を転換出来ない。つまり物語的な性格がない。一場に感動を集注（ママ）することになるわけだ。例へば楠公櫻井の別れの一場へすべてを昂めるわけだが、紙芝居は便利なことには楠公の一生でも書いてしまう。そういふお互の特徴がはっきり見られる。同じ慰楽に用ひるとしても指人形劇は愉快な笑ひに終り、紙芝居は何となく感慨深げな格好で終る。啓蒙的な要素はどちらにもあるのだが、紙芝居の方が訴へ易いためか、観客の心理をその方向にまとめて組立てる可能性が多いやうだ。どうせ「動き」といふ点では問題にならぬ紙芝居だからこそ、絵のやりくりで苦勞する次第だが、抒述の地の文だけは独特なもので、これは十分補つて特色をなしてゐることがよく判る。それで文芸的な傾向も悪くないと思ったのだ」（夏の夜の独白『紙芝居』6巻8号、1943年8月）

戦時下の文化運動として指人形劇や素人演劇が広がるなか、紙芝居はこれらとどのように向かい合っていくかが課題となった。そこで堀尾は、紙芝居が「動き」という点ではこれらに敵わないとしたうえで、絵と脚本という独自の形式に注目し、こうした要素が指人形劇や素人演劇とは異なる感動を観客にもたらすとした。これを踏まえ、高瀬氏は、堀尾が自身のペンネームを「ぬきながら生」（「顔を出さぬ原則について」『紙芝居』6巻2号1943年2月）としている点に注目し、紙芝居の実演にあたっては、絵と絵の「間」が大事であり、次の絵に移るその「間」を地の文でいかに読むか。そこに演じ手の力量があらわれるとした。

高瀬氏に続いて登壇した瀧見氏は、まず、人形劇「なかよし」を実演した。続いて、講演で1923年を嚆矢とする現代人形劇の歴史を整理し、「なかよし」を事例に戦時下の国策人形劇の戦後人形高揚期への影響について論じた。以下、瀧見氏の講演の内容を要約する。

1923年を嚆矢とする現代人形劇は、大正期の新興芸術運動と教育現場での実践という二つの流れのなか



写真1 高瀬氏の実演の様子



写真2 瀧見氏の実演の様子





写真3 湯見氏の講演の様子

で起こった。戦時下になると、大政翼賛会の下で国策人形劇（翼賛人形劇）運動が進められる。モダニズムや新興芸術運動の流れを汲む現代人形劇が若手芸術家によって担われたのに対し、翼賛人形劇運動の普及の担い手となったのは、こうした流れと離れたところにいる人びとだった。その一人、松葉重庸は、東京帝国大学時代にセツルメントに参加して児童文化運動にかかわっていた。大政翼賛会に参画した松葉は、翼賛人形劇の公演活動や講習会を推進したほか、入門書の執筆や各種雑誌への投稿も積極的に行った。戦後、様々な文化運動が起こるなか、人形劇に新たな動きがみられる。人形劇は学生によって実演されたほか、工場、企業、官公庁などあらゆる場で取り組まれ、専門家集団としての人形劇団も各地に誕生するなど、戦後の高揚期を迎える。この時期に生まれたのが、三木信一の作による「仲よし」である。1947年ごろに京都の児童芸術研究所の研究発表会で発表され、『やさしい人形劇脚本集』（児童芸術研究所、1950年）に掲載されたこの作品は、今日も「なかよ

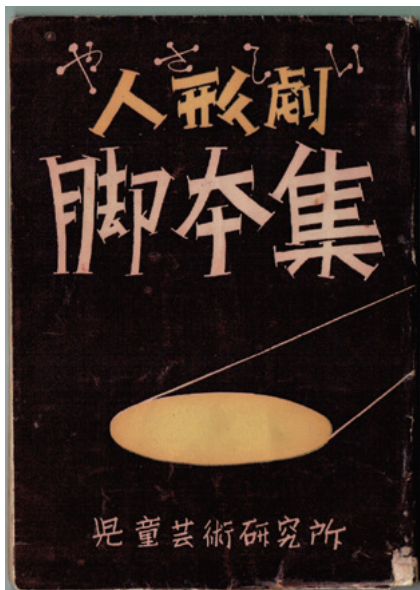


写真4 安田氏のコメントの様子

し」として内容がほとんど変えられずにアマチュアからプロまで広く演じられている。「なかよし」（「仲よし」）は、右手と左手、二つの人形が「かくれんぼ」や「すもう」、「綱引き」をするものである。湯見氏は、同作の、動きやキャラクターごとの話し方や発声の使い分けなどの基礎的な練習となるエチュードとしての性格に注目したうえで、同作を、翼賛人形劇の講習会で行われた台詞のない短い演技で人形の動きを学ぶ際の題材を脚本化したものであり、翼賛人形劇から直接の導入ではないにしても、その流れを汲んで、いわば翼賛人形劇が残した唯一のものと言えなくもない、と位置づける。

続いて、両名の実演、解説、講演を受けて、研究班から安田常雄氏が登壇した。安田氏は、戦時下の紙芝居と人形劇を分析する際の方法として、①同時代の社会思想との対応性（モダニズム、プロレタリア文化、総力戦）の問題、②作品分析（主題と描き方の方法）と製作主体分析（画家、脚本家の思想と思考様式）、③同時代の運動・組織と制度のなかでの機能分析、の三つを提示した。

最後に、高瀬氏、湯見氏、安田氏、松本が登壇して質疑応答を行った。質疑応答では、①紙芝居、人形劇で喚起できるものの違い、②戦時下の紙芝居や人形劇を今日実演することの意義、③紙芝居と人形劇の「交差点」という課題設定の意義、などについて議論された。



資料2 『やさしい人形劇脚本集』児童芸術研究所



写真5 質疑応答の様子

## 研究会の成果

戦時下の紙芝居をいかに分析するか、方法論の問題は当研究班において常に議論されてきた。人形劇との「交差」は、そうした方法論の模索の一つである。

要旨で述べたように、紙芝居と人形劇は、ともに戦時下に文化運動として注目され、各地で実演されてきた。①こうした運動で実演されたのはどのような作品だったのか。②運動はそれぞれの領域でどのように位置づけられているのか。このような問いを立てた本研究会で実演された二つの作品が、①、②を考えるうえで重要なものであることは、要旨で見た通りである。注目したいのは、戦時下の紙芝居と人形劇が、ともに両者の違いとして「動き」を挙げたうえで、自身の作品の性格を位置づけている点である。人形劇については、瀧見氏が質疑応答のなかで、人形劇は演劇で直接語るので感情を喚起できる、と述べているように、「直接語る」ことができるのが強みであった。これを可能にするのが「動き」だった。注目したいのは、翼賛人形劇運動が講習会や入門書の執筆を通じて人形劇の「動き」を練習させ、人形劇の実演者を育てることで、人形劇の裾野を広げようとしていたことである。瀧見氏が、「なかよし」を、動きやキャラクターごとの話し方や発声の使い分けなどの基礎的な練習となるエチュードとしての性格をもっているとして、翼賛人形劇が残した唯一のものと言えなくもない、と評価するのも、そうした流れを踏まえてのことであろう。ここに、戦時下において自らの立ち位置を確保しようとする人形劇の、戦前期と異なる点がある。

一方、紙芝居については、堀尾の、紙芝居には「動き」がない分、観客に訴えかける要素として絵と脚本が重要であるという指摘を踏まえた高瀬氏が、次の絵に移るその「間」をいかに読むかに演じ手の力量があらわれると述べているように、「動き」がないなかで、いかに演劇として成立させるか、観客を魅了するかが重要な課題であった。戦時下において、このような実演に関する議論が進んだ理由は、堀尾らがかかわった教育紙芝居が、「職業化」された街頭紙芝居を意識したうえで自らの活動の意義を位置づける必要があったからであろう。ここに、人形劇と紙芝居の共通する動きを見ることができる。

このような「動き」と演じ方をめぐる本公開研究会の議論は、登壇した高瀬氏と瀧見氏が、それぞれ多くの作品に触れ、実演を重ねてきたからこそできたものである。まずは何よりも多くの作品に触れ、その知見をもとに傾向を導き出す。その「交差」によってこうした議論が展

開できたといえる。

では、本公開研究会は、当研究班における方法論の問題に対して、どのような解を提示したのか。シンプルではあるが、それは、紙芝居が絵・脚本・実演の三位一体によって成立していることを踏まえたうえで、作品分析を行うということに尽きるのではないかと。すでに当研究班では、鈴木一史氏が紙芝居画家に注目して作品分析を行い、教育紙芝居が「戦争を描けなかった」ことを指摘している（「戦争を描けなかった紙芝居―戦時下の教育紙芝居をめぐる議論から―」『国策紙芝居からみる日本の戦争』、2018年）。ここで鈴木氏は、画家の描いた絵を分析するにあたり、教育紙芝居の製作を推進した協会や画家の意識に注目し、その差異を彼らが出席した座談会から明らかにしている。鈴木氏は主に絵に注目したが、鈴木氏の議論は脚本や実演の仕方にも通じるものである。当研究班が収集した紙芝居の中には、脚本の書き換え、絵の差し替えや、実演時の脚本の読み替えを行った作品を多く確認できる。「動き」がないからこそ絵と脚本、演じ方が重要であった戦時下の紙芝居において、なぜ、どのように検閲済の作品に対する修正や書き換え、読み替えが行われたのか。こうした行為が各地域で実演時に行われていたことを踏まれば、こうした行為を踏まえた個々の作品の分析を通じて、紙芝居が何を描き、伝えようとしたのか（あるいは描けず、伝えられなかったのか）を明らかにすることができるのではないかと。個々の作品の具体的な分析は今後の課題であるが、紙芝居と人形劇を「交差」させることで、分析の方法について一つの示唆を得たことは、今回の成果といえる。

## 謝辞

本公開研究会は、はじめ2019年10月13日に開催するはずでしたが、台風のため開催延期となりました。その後、2020年2月29日に開催することとなったものの、今度は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、再び開催延期となりました。こうした二度の延期を受けて、今回、無事に開催することができました。二度の延期にもかかわらず実演、講演を快く引き受けてくださった高瀬氏、瀧見氏、2019年と2020年の公開研究会の企画・立案を行った本研究班の原田広氏に深くお礼申し上げます。また、非文字資料研究センターのスタッフの皆様には、年度末の忙しいなか、多大なるご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。